連結会計②

成果連結（商品売買取引）

【重要性：A】

ＰＯＩＮＴ！

① 売上高と仕入高の相殺消去の意味を理解しよう！

② 売上債権と仕入債務の相殺消去の意味を理解しよう！

③ 連結仕訳をマスターしよう！

主な勘定科目

「売上高」勘定（収益）･「売上原価」勘定（費用）

「売掛金」勘定（資産）･「買掛金」勘定（負債）

（１）成果連結

連結仕訳には、対象となる取引の内容によって、①親会社の投資と子会社の資本に関する取引の消去・修正を行う「**資本連結**（しほんれんけつ）」と、②親会社の売上と子会社の仕入の取引等の消去・修正を行う「**成果連結**（せいかれんけつ）」があります。これまでは、資本連結を学習してきましたが、ここからは成果連結を学習します。まず、「連結会社間取引等の相殺消去」に関する連結仕訳を学習します。

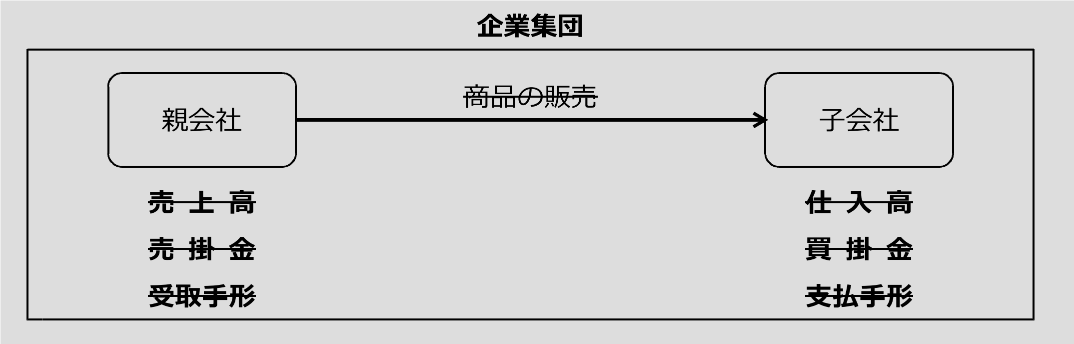
親会社と子会社との取引は企業集団内の取引であり、連結上は**内部取引**であるため、相殺消去します。また、連結会社に対する債権と債務の期末残高は、**企業集団内の取引から生じた残高**ですので、相殺消去します。相殺消去される項目の例としては、以下のものがあります。

	連結会社間取引 （連結損益計算書項目）	連結会社に対する債権・債務等 （連結貸借対照表項目）
商品売買取引	**売上高と仕入高の相殺消去**	**売上債権と仕入債務の相殺消去**
資金貸借取引	**受取利息と支払利息の相殺消去**	**貸付金と借入金の相殺消去** **未収利息と未払利息の相殺消去**

（２）商品売買取引

親会社が子会社に商品を販売している場合、連結上は内部取引に該当します。そこで、連結上は取引がなかったとするため、**「売上高と仕入高の相殺消去」**を行います。

また、期末に子会社に対する売上債権（売掛金・受取手形）及び親会社に対する仕入債務（買掛金・支払手形）の残高があった場合には、**「売上債権と仕入債務の相殺消去」**を行います。



例題　親会社P社は子会社S社に商品を1,000円で販売し、代金は掛けとした。なお、期末現在、掛代金の決済は行われていない。そこで、必要な連結仕訳を答えなさい。

①　個別上の仕訳

・親会社

借方科目	金額	貸方科目	金額
売掛金	1,000	売上	1,000

・子会社

借方科目	金額	貸方科目	金額
仕入	1,000	買掛金	1,000

②　連結上あるべき仕訳

借方科目	金額	貸方科目	金額
仕訳なし			

③　連結仕訳（②－①）

個別上の仕訳を合算し、消去するためにそれぞれ貸借反対に連結仕訳を行います。なお、連結財務諸表は個別財務諸表をもとに作成しますので、連結仕訳も「売上」は「**売上高**」、「仕入」は「**売上原価**」といった財務諸表の科目で行います。

借方科目	金額	貸方科目	金額
売上高	**1,000**	**売上原価**	**1,000**
買掛金	**1,000**	**売掛金**	**1,000**

例題　**当期に親会社P社は子会社S社に商品を3,000円で掛けで販売した。なお、親会社P社は子会社S社から売掛金の代金として1,800円を受け取っており、子会社S社に対する売掛金の期末残高は1,200円であった。そこで、必要な連結仕訳を答えなさい。**

①　個別上の仕訳

・親会社

借方科目	金額	貸方科目	金額
売掛金	3,000	売上	3,000
現金預金	1,800	売掛金	1,800

・子会社

借方科目	金額	貸方科目	金額
仕入	3,000	買掛金	3,000
買掛金	1,800	現金預金	1,800

②　連結上あるべき仕訳

借方科目	金額	貸方科目	金額
仕訳なし			

③　連結仕訳（②－①）

個別上の仕訳を合算すると、「現金預金」は相殺されます。それ以外の科目は相殺消去するためにそれぞれ貸借反対に連結仕訳を行います。

なお、解答作成上は、「売上」や「仕入」等の損益項目は、**当期に発生した金額**を相殺消去して下さい。また、「売掛金」や「買掛金」といった貸借対照表項目は、当期中の増減を考えずに**当期末の残高**を相殺消去すれば良いです。

借方科目	金額	貸方科目	金額
売上高	**3,000**	**売上原価**	**3,000**
買掛金	**1,200**	**売掛金**	**1,200**

売掛金：3,000－1,800＝期末残高1,200

成果連結（手形取引）

【重要性：A】

ＰＯＩＮＴ！

①　連結上あるべき仕訳をイメージできるようになろう！

②　連結仕訳をマスターしよう！

主な勘定科目

「受取手形」勘定（資産）・「支払手形」勘定（負債）

「借入金（短期借入金）」勘定（負債）

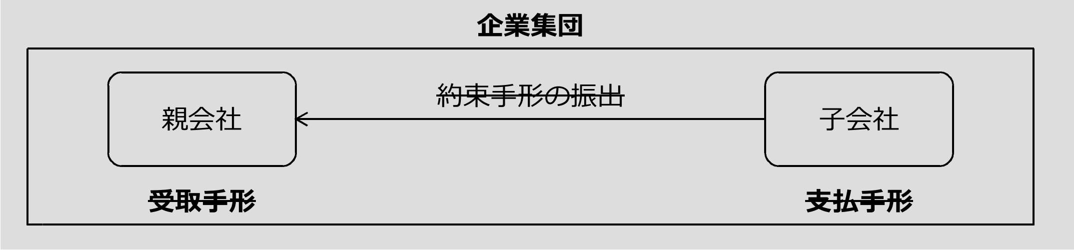
「手形売却損」勘定（営業外費用）

「支払利息」勘定（営業外費用）

「前払費用（前払利息）」勘定（資産）

（１）連結会社振出手形を他の連結会社が保有している場合

連結会社間で約束手形を振り出した場合、それぞれの会社では受取手形や支払手形で処理していますが、連結上は取引が行われていないことになります。そこで、受取手形と支払手形の残高があった場合には「**受取手形と支払手形の相殺消去**」を行います。



例題　**親会社P社は子会社S社から売掛金の決済代金として約束手形1,000円を受け取った。なお、期末現在、手形代金の決済は行われていない。そこで、必要な連結仕訳を答えなさい。**

①　個別上の仕訳

・親会社

借方科目	金額	貸方科目	金額
受取手形	1,000	売掛金	1,000

・子会社

借方科目	金額	貸方科目	金額
買掛金	1,000	支払手形	1,000

②　連結上あるべき仕訳

借方科目	金額	貸方科目	金額
仕訳なし			

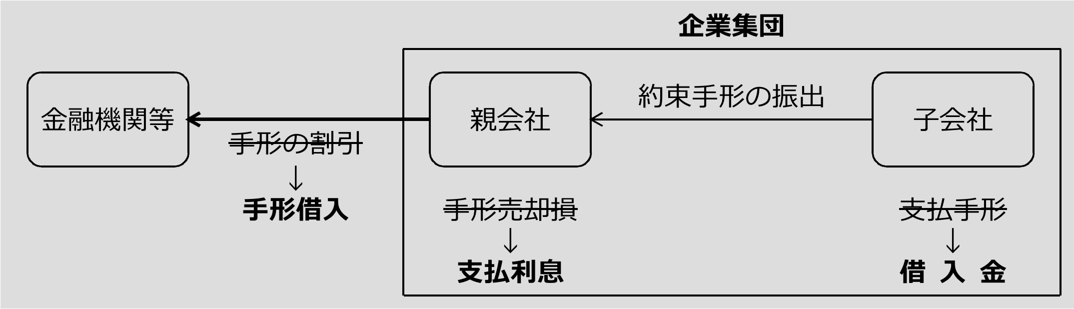
③　連結仕訳（②－①）

借方科目	金額	貸方科目	金額
支払手形	**1,000**	**受取手形**	**1,000**

（２）割引手形

子会社が親会社に振り出した約束手形を、親会社が金融機関等で割り引いた場合，連結上は「自己（企業集団）が振り出した手形を自己（企業集団）で割り引いた」ことになり、**手形振出による借入**と考えられます。そこで、「**支払手形**」から「**借入金**（通常、**短期借入金**）」に振り替えます。

手形売却損は借入金に対する利息の前払いと考えられますので、「**手形売却損**」から「**支払利息**」に振り替えます。また、割引手形が期末において未決済の場合、支払利息のうち次期以降の期間に対する分を「**支払利息**」から「**前払費用**（前払利息）」に振り替えます。



例題　**親会社P社は子会社S社から売掛金の決済代金として受け取った約束手形5,000円を企業集団外部の金融機関で割り引いた。なお、決算日において当該手形の満期日（決算日から1ヶ月後）は到来していない。そこで、必要な連結仕訳を答えなさい。また、割引時の手形売却損は240円であり、翌期首から満期日までの期間の額は100円であった。**

①　個別上の仕訳

・親会社

借方科目	金額	貸方科目	金額
受取手形	5,000	売掛金	5,000
現金預金	4,760	受取手形	5,000
手形売却損	240		

・子会社

借方科目	金額	貸方科目	金額
買掛金	5,000	支払手形	5,000

②　連結上あるべき仕訳

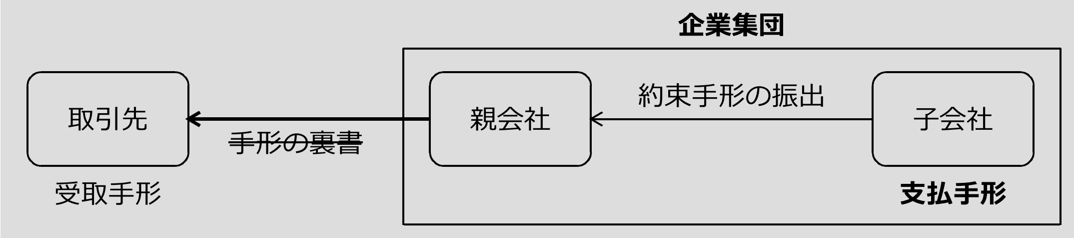
借方科目	金額	貸方科目	金額
現金預金	5,000	短期借入金	5,000
支払利息	240	現金預金	240
前払費用	100	支払利息	100

③　連結仕訳（②－①）

借方科目	金額	貸方科目	金額
支払手形	**5,000**	**短期借入金**	**5,000**
支払利息	**240**	**手形売却損**	**240**
前払費用	**100**	**支払利息**	**100**

（３）裏書手形

子会社が親会社に振り出した約束手形を、親会社が外部の第三者へ裏書譲渡した場合，連結上は「自己（企業集団）が振り出した手形を外部の第三者へ渡した」ことになり、手形の裏書譲渡ではなく、「企業集団による約束手形の振出」となります。子会社で計上している支払手形は外部の第三者への仕入債務であるため、修正する必要はありません。したがって、**特に連結仕訳はありません。**



例題　**親会社P社は子会社S社から売掛金の決済として受け取った約束手形5,000円を企業集団外部の仕入先へ裏書譲渡した。なお、決算日において当該手形の満期日（決算日から1ヶ月後）は到来していない。そこで、必要な連結仕訳を答えなさい。**

①　個別上の仕訳

・親会社

借方科目	金額	貸方科目	金額
受取手形	5,000	売掛金	5,000
仕入	5,000	受取手形	5,000

・子会社

借方科目	金額	貸方科目	金額
買掛金	5,000	支払手形	5,000

②　連結上あるべき仕訳

借方科目	金額	貸方科目	金額
仕入	5,000	支払手形	5,000

③　連結仕訳（②－①）

借方科目	金額	貸方科目	金額
仕訳なし			